

家庭科教育における大学・附属学校間連携に関する基礎的研究

- 大学生によるミシン縫い学習の支援を通して -

A Pilot Study for Cooperation between University and its Attached Schools
on Home Economics Education

~ Supported by University Students in Sewing Class of Elementary Attached School ~

丸橋 静香	平井 早苗	多々納 道子
Shizuka MARUHASHI	Sanae HIRAI	Michiko TATANO
竹吉 昭人	湊 奈津子	
Akihito TAKEYOSHI	Natsuko MINATO	

島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要第3号

平成16年3月

「教育臨床総合研究紀要3 2003研究」

家庭科教育における大学・附属学校間連携に関する基礎的研究

- 大学生によるミシン縫い学習の支援を通して -

A Pilot Study for Cooperation between University and its Attached Schools
on Home Economics Education

~ Supported by University Students in Sewing Class of Elementary Attached School ~

丸橋 静香* 平井 早苗**
Shizuka MARUHASHI Sanae HIRAI
多々納 道子*** 竹吉 昭人****
Michiko TATANO Akihito TAKEYOSHI
湊 奈津子****
Natsuko MINATO

要 旨

本研究では、大学・附属小学校間でミシン縫いの授業を通じた連携を行い、その意義について考察した。大学生による小学生への実技学習支援は、大学生においては教科知識の充実や教職への意識を促すという点で、小学生においては学習意欲の促進や知識技能の定着という点で有効であることが明らかになった。また、教師教育体制の強化と附属学校児童・生徒の学習の充実という観点に立てば、大学・附属学校間連携がいっそう推進されるべきことが確認された。

[キーワード] 大学・附属学校間連携、家庭科教育、教師教育、生活に役立つ物の製作、学生による支援

I . はじめに

今日、社会の諸体制が大きく改革されるなか、大学の教育学部および附属学校園の存在意義も改めて問われてきている。また、教育の現状に目をやれば、基礎学力や学習意欲の育成、いじめや不登校等さまざまな問題が山積しており、とくに地方大学の教育学部や附属学校園には、実践的指導力を有した教師の輩出や地域の教育センターとしての役割が以前にもまして求

* 島根大学教育学部初等教育開発講座

** 島根大学教育学部附属小学校

*** 島根大学教育学部人間生活環境教育講座

**** 島根大学大学院教育学研究科家政教育専修

められている。こうした社会的要請に応えるためには、これまで以上に大学と附属学校園との連携が強化されなければならない。

本教育学部の教師教育は、1989年教育職員免許法が改正され教育実習の単位が増加したのに伴い、従来からの教育実習を組み込んだ教育実地研究（Ⅰ～Ⅳ）を設定し、大学と附属学校園が連携協力して、段階的に指導するというシステムをとっている。加えて、初等・中等段階の各科教育法には、概説科目と臨床科目をセットで設け、教員として必要な資質を養成することを目指している。このように、カリキュラム上では理論と教育実践の結合を意図した充実が図られており、実際成果も上がってきている。とはいえ、これまで大学生が児童・生徒に接する機会は、教育実習時にほぼ限られており、教育法に関する授業において機会を設定することはあまりできなかった。今後本学部では改革に伴い、体験活動時間の創設や授業科目の変更がなされるが、教師教育体制の強化という点から考えれば、教育実習以外の授業でも大学生・大学院生が児童・生徒に接しながら、教師としての資質を高めていくということが必要になるのではないか。

そこでわれわれは、家庭科教育の立場から大学と附属学校の連携の在り方を探ることを目的に、試行的ながらミシン縫いの授業を通じた連携活動を行った。本活動では、附属小学校におけるミシン縫いの授業において、その実習を大学生が支援するというを行った。ミシン縫いという実技の授業を連携の場面に選定したのは、生活経験の希薄化という今日の子どもの実状と関連している。授業に大学生がサポートとして授業に参加することで、児童の生活に関する技能向上がいつそう期待できると考えたためである。

本稿では、まずこの連携の試みについて報告し、次いでその意義について大学生と小学生の学習効果という点から検討する。最後に、家庭科教育の立場から大学と附属学校園との連携の在り方について若干の考察を行う。

Ⅱ．授業支援の概要

1．参加学生

本授業支援は、教育実習前の学生と教育実習後の学生が、2003年11月から12月にかけて、島根大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）5年生の家庭科の授業に参加し、ミシン縫いに関する授業観察および平井早苗の指導の下、実技学習の支援を行うというかたちで実施された。教育実習前の学生は初等家庭科教育法臨床（後期月7・8限：担当 丸橋静香）を受講している学部2回生7名であり、教育実習後の学生は、家庭科授業研究（後期木5・6限：担当 多々納道

参加学生
教育実習前：島根大学教育学部2回生7名
教育実習後：島根大学大学院教育学研究科1回生2名 島根大学教育学部3回生1名 (いずれも家政教育専攻)
日時
2003年11月～12月
対象学級
島根大学教育学部附属小学校 5年1組・5年2組
場所
島根大学教育学部附属小学校 家庭科室

図Ⅱ - 1 支援概要

子)を受講している大学院1回生2名と学部3回生1名である(なお、参加学生はすべて家政教育を専攻する学生である)。

教育実習後の大学院生2名と学部生1名の計3名が5年1組、教育実習前の学部生7名が5年2組の指導にあたった。以下、5年1組の授業を授業①、5年2組の授業を授業②とする。

2. 支援授業

授業①②はともに、次に示す指導計画(平井早苗作成)に従って行われた。なお、学生は第2次、第3次(3・4・5・6/6)の支援を行った。

1. 単元名 ミシンぬいを楽しもう!～ぞうきんの製作～

2. 実施学級 島根大学教育学部附属小学校 第5学年1組(36名)・2組(36名)

3. 指導者 平井 早苗

4. 実施時期 2003年11月～12月

5. 単元目標

ミシンぬいを生かしながら、ぞうきんの製作を楽しむことができる。

ミシンの取り扱い・糸のかけ方・ぬい方を正しく理解し、自分の力でミシン操作ができるようになる。

6. 単元構想

5年生の子どもたちは、1学期に、「めざそう!手ぬい名人～世界に一つだけの小物の製作～」の学習において、なみぬいや半返しぬい、ボタンつけなどの基礎ぬいに意欲的に取り組み、身に付けた基礎ぬいの技能を生かしながら、自分の思いや願いを取り入れた世界に一つだけの小物の製作を楽しんだ。

そこで、これらの子どもたちの取り組みを踏まえ、手ぬいのよさだけでなく、ミシンぬいのよさを理解させるとともに、ミシンぬいを取り入れた生活の楽しさを感じ取らせることをねらいとして、「ミシンぬいを楽しもう!～ぞうきんの製作～」の単元を構想しようと考えた。単元のねらいに迫るために、特に次のことに留意することにした。

まず、子どもたち一人ひとりが、上糸のかけ方や下糸の引き出し方などの操作を的確に行えるよう、実際の操作を行う前に、ミシン操作のビデオを視聴させる活動取り入れることである。次に、子どもたちが、ミシン操作につまずいた時、いつでも質問することができ、ミシン操作への抵抗感をなくしていけるよう、各グループにサポート役の大学生を配置することである。

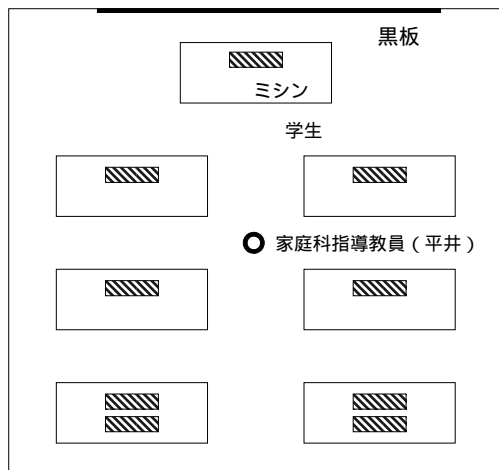
子どもたちは、身に付けている衣服はもちろん、たくさんのミシンぬい製品に囲まれて生活している。このようにミシンぬいは、子どもたちの身近にあるにもかかわらず、そのよさを見過ごして生活している。また、生活が便利になり、ぞうきんも買うことができる時代になったため、家庭にミシンがなく、ミシンに触れることがない子どもたちも増えてきている。このような現状からも、本単元の学習を通して、子どもたちが、ミシンぬいのよさに目を向け、ぞうきんを製作することを通して、ミシンぬいを取り入れた生活の楽しさを感じ取ること願っている。

7. 授業計画 (全: 6時間)

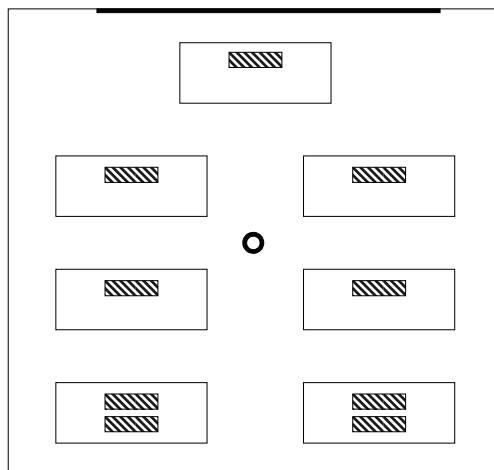
次	主な活動と学習のめあて	時	具体的な活動内容
1	ミシンについて知っていることを話し合う。 ビデオを視聴する。 ミシンを使って、からぬいをする。 ミシンの操作を覚えよう～からぬい～	1 2	・手ぬいとの比較やミシンの歴史なども取り入れながら、ミシンについて知っていることを話し合う。 ・ビデオでミシンの出し入れ・しくみ・からぬいの仕方について視聴する。 ・各グループ(4人にミシン1台)に分かれ、一人ひとりがミシン練習布を使って、からぬいをする。
2	ビデオを視聴する。 ミシンを使って、本ぬいをする。 ミシンの操作を覚えよう～本ぬい～	3 4	・ビデオで下糸の巻き方・上糸の通し方・下糸の引き出し方・本ぬいの仕方について視聴する。 ・下糸をグループのみんなで協力し合って巻く 一人ひとりが上糸を通す 一人ひとりがミシン練習布を使って、本ぬいをする。
3	ぞうきんをぬう。 覚えた操作を生かしてぞうきんをぬおう ミシンぬいの学習をふりかえる。	5 6	・ぞうきんのつくり方の説明を聞き、ミシンでどのようにぬうか考える。 ・覚えた操作を生かしながら、糸の強弱を調節して、ぞうきんをぬう。 ・ふりかえりカードを記入する。

3. 支援体制

指導計画が示す通り授業①②ともに児童36名は4名ずつ9グループを形成し、各グループにミシン1台が与えられた。家庭科室の作業台は7テーブルしかないため、5グループは1つの作業台を専用できたが、残りの4グループは2グループで1つの作業台を使用した。授業①では学生1名が3グループずつ、授業②では学生1名が1ないし2グループの支援を担当した(図Ⅱ-2,3参照)。



図Ⅱ-2 授業①



図Ⅱ-3 授業②

学生による児童への具体的な支援は、ミシン操作、縫い方の説明、縫い方・縫い目の点検や児童からの様々な質問に対応するというものであった。このような支援体制のもとで、きめ細かくかつ児童の手待ち時間を極力少なくすることによって、ミシン縫いのつまずきや抵抗感を無くすことを意図した。一方、家庭科指導教員(平井)は、クラス全体を指導するという体制をとった。

Ⅲ．授業支援の効果① 5年1組の授業について

Ⅲ、Ⅳでは、大学生による授業支援にどのような意義があるかということについて、児童と大学生それぞれの学習効果という点から検討する。なお、授業①と授業②では、支援学生数や学級の実態などが異なることから、分析の観点は同じではない。

1. 児童

(1) 製作したぞうきんの評価

ミシン縫いをしたぞうきんは、完成しているかどうかと縫い目に重点をおいて評価することとした。まず、完成しているかどうかについては、1)外側縫い、2)内側縫い、3)チャコによる印つけ、4)名前の縫い取り(手縫い)および5)糸処理の5つを評価観点とした。そして、指導教員と支援学生が児童の出来上がったぞうきんを各々の観点ごとに5段階の評定尺度によって評価した。平均値をまとめたものが表Ⅲ-1である。

表Ⅲ-1 ぞうきんの評価 (点)

	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差値	平均値	標準偏差値	
完成しているか	2.28	1.00	4.20	0.58	4.21**
縫い目は整っているか	3.80	0.64	4.06	0.47	1.21
表裏の縫い目のバランスはよいか	3.73	0.68	4.00	0.76	1.00
角の方向転換はきれいか	3.61	0.79	4.01	0.61	1.45
手縫いの定着はできているか	2.18	1.65	4.24	1.17	3.65**
合計	16.23	2.34	20.71	2.12	5.28**

** . . . P < 0.01

男子についてみると、縫い目に関して「縫い目は整っているか」、「表裏の縫い目のバランスはよいか」、「角の方向転換はきれいか」の3つの観点は、いずれも3点台後半の得点で、かなりの達成度といえる。これに対して、「完成しているか」と「手縫いの定着はできているか」については、2点台前半の得点であり、達成度は十分とはいえなかった。また、縫い目に関する評価観点と比較して、これら二つの評価観点とも標準偏差値が高く、達成度には個人差が大きいことが明らかとなった。

女子については全ての評価観点が4点台と高く、目標をかなり達成しているといえる。そのため、男子と比較すると、「完成しているか」および「手縫いの定着はできているか」については、t検定により1%水準で有意差があり、男女差が認められた。製作という技能の習得に

重点をおいた学習のためか、男女差があったことから、今後の支援においては配慮が必要となる。

(2) 学習意欲

児童がミシンによるぞうきんの製作に意欲的に取り組んだかどうかについて、1) 学習題材への興味、2) 学習内容の理解、3) 工夫、4) 自己評価という4つの観点から調査した。学習内容の理解という点は、とくに大学生による支援の効果とも関連させた。表Ⅲ - 2は調査結果をまとめたものである。なお、有効回答は31名分である。

表Ⅲ - 2 学習意欲 人(%)

	男子		女子		χ ² 値
	はい	いいえ	はい	いいえ	
ミシンを使ったぞうきんぬいの学習を楽しんですることができましたか	9(81.8)	2(18.2)	19(95.0)	1(5.0)	0.31
上手にぬうために工夫ができましたか	5(45.6)	6(54.5)	12(60.0)	7(35.0)	0.89
ミシンぬいを使って自分で満足のいくぞうきんがぬえましたか	6(54.5)	5(45.6)	13(65.0)	7(35.0)	0.33
ぞうきん以外に、もっといろいろな物をミシンを使ってぬってみたい気持ちになりましたか	7(63.6)	4(36.4)	19(95.0)	1(5.0)	3.10
ぞうきんぬいの学習を大学生の人にアドバイスしてもらいながら行って、よく分かりましたか	10(90.9)	1(9.1)	20(100.0)	0(0.0)	0.10

表Ⅲ - 2から明らかなように、「ミシンを使ったぞうきんぬいの学習を楽しんですることができましたか」について「はい」と答えたのは、男子81.8%、女子95.0%という非常に高い割合であった。「上手にぬうために工夫ができましたか」は、男子は45.6%と半数以下、女子では60%にとどまった。今回のぞうきんの製作において、ミシン縫いに初めて挑戦するものの割合が男女合わせて64.5%と多かったためか、上手に縫うために工夫するという段階に達成したものは、それほど多くなかったものと考えられる。「ミシンぬいを使って自分で満足のいくぞうきんがぬえましたか」に「はい」と答えたものは、男女とも過半数を超えた。「ぞうきん以外に、いろいろな物をミシンを使ってぬってみたい気持ちになりましたか」は、男子が63.6%であるのに対し、女子は95.0%という高い割合であり、男女差があった。「ぞうきんぬいの学習を大学生の人にアドバイスしてもらいながら行ってよく分かりましたか」については、男子90.9%、女子100.0%というきわめて高い割合であった。3班に1人という大学生による支援体制であったが、児童にとって学習内容の理解という観点からみて、効果は高いということが理解できた。

以上のように、大学生の支援の下で、ミシンを使ってぞうきんを製作したことは、児童の理解を促し、そのことが製作を楽しむことにつながったものと思われる。さらに、女子の場合は、もっといろいろなものを縫ってみたいという意欲にまで高まっており、大学生の指導参加は児童の実技学習に効果がきわめて大きかったことが明らかとなった。

(3) 児童による振り返り

授業①では、第3次(5・6/6)終了後、児童に自由記述による自己評価を行わせた。表Ⅲ - 3は、自由記述のなかで、積極的な記述と反省的な記述の取り出し、それを項目ごとに整

理したものである。なお児童は、複数項目を記述している。

表から分かるように、積極的な記述の割合が64.7%と高く、今回児童は授業に積極的に関わったということがいえる。さらに、そのうち「大学生の協力がよかった」と答えている児童もかなりおり、児童の授業への積極的な取り組みに、大学生の参加が大きな影響を有していることが分かる。

2. 大学生

児童のミシン縫いによるぞうきん製作を支援した大学生の感想をみてみよう。授業①では、第3次終了後に「附属小学校における指導参加に関して」という質問紙を配布し記入してもらった。回答については、対象人数が3人であるので、実数で表現することにする。

「小学生の指導に関わってどう感じましたか」については、3人とも一致して「楽しかった」としていた。また、「自分自身のミシンの操作や縫い方についてどう感じていましたか」は、「自信があった」が2人、「あまり自信はないが、一通はできると思っていた」が1人であった。実際に指導しての感想は、3人とも「何とか指導できたと思う」であった。

支援したこの3人の学生はいずれも「教員志望」であり、今回実際に指導に関わったことから、「教師の指導の仕方をもっと勉強したいと思った」というのが、共通した感想であった。

さらに、教育実習が始まる前に、附属小学校で直接指導に関わることの是非について尋ねた。これについても、共通して「良いことだと思う」という回答であった。その理由として、次のようなことを自由記述しているので抜粋しておく。「教師の指導や子どもたちとの接し方などは、経験すればするほど上手くなると思います。教育実習前にもこのような機会が設けられるのであれば、今後に生かせる体験になると思います。ただし、指導にあたる大学生に対して、その指導での役割など明確にしておく必要があると思います。『子どもの活動の様子が分かっている方が、実習前に自分の実習中の姿を想像しやすいから。』『子どもとの接し方、話しかけ方等を勉強できるから』。

以上の大学生の感想から判断して、支援した学生にとっても、支援という形態で児童と直接ふれ合うことは、楽しさを味わうとともに、指導への自信を得ることにつながったといえよう。また、すでに教育実習を終えているということから、授業①に参加した学生は、教育実習以外で子どもの指導に関わることの意義を積極的に認めている。この実習を通して「特に感じること」として、「教師の指導の仕方をもっと勉強したいと思った」ということを3人全員が挙げていることからそれが伺える。したがって、教育実習を終えてさらに指導経験を積むことの意義は大きいと考えられる。

表Ⅲ - 3 児童の自由記述項目(授業①)

	第3次終了後(計32名)	人(%)
積極的な記述	楽しかった	14(20.6)
	上手にできた	12(17.6)
	もっと縫いたい	10(14.7)
	大学生の協力がよかった	5(7.4)
	上手になりたい	1(1.8)
	友達と協力できた	1(1.8)
	工夫できた	1(1.8)
	気持ちをこめた	1(1.8)
	小計	44(64.7)
反省的な記述	失敗難しかった	9(13.2)
	難しかった	6(8.8)
	思うようにできなかった	6(8.8)
	大変だった	2(2.9)
	あきらめてしまった	1(1.8)
	小計	24(35.3)
	合計	68(100.0)

IV . 授業支援の効果② 5年2組の授業について

1 . 児童

(1) 評価票による自己評価

授業②では、全6時間が終了したぞうきんの完成後、児童に「ふりかえり」のプリントを配布し、自己評価を行わせた。評価項目は表IV - 1 に示す通りである。項目は学習題材への1) 興味・関心、2) 知識・理解、3) 工夫、4) 技能の観点から設定した。

表IV - 1 児童の自己評価(評価票)

	男子		女子		χ ² 値
	はい	いいえ	はい	いいえ	
ミシンを使ったぞうきんぬいの学習を楽しんですることができましたか。	12(85.7)	2(14.3)	18(100.0)	0(0.0)	0.85
ミシン目の強い・弱いや大きい・小さいの調節の仕方が分かりましたか。	13(92.9)	1(7.1)	17(94.4)	1(5.6)	0.30
上手にぬうために工夫ができましたか。	10(71.4)	4(28.6)	15(83.3)	3(16.7)	0.14
ミシンぬいを使って自分で満足のいくぞうきんがぬえましたか。	8(61.5)	5(38.7)	12(70.6)	5(29.4)	0.27
ぞうきん以外に、もっといろいろな物をミシンを使ってぬってみたい気持ちになりましたか。	12(85.7)	2(14.3)	17(94.4)	1(5.6)	0.05
ぞうきんぬいの学習を大学生の人にアドバイスしてもらいながら行って、よくわかりましたか。	13(92.9)	1(7.1)	18(100.0)	0(0.0)	0.02

「ミシンを使ったぞうきんぬいの学習を楽しんですることができましたか」の項目では、学習題材への興味関心を問うているが、男子では85.7%、女子では100%が「はい」と答えており、今回のミシン縫いの授業に積極的に楽しんで取り組んだことが分かった。「ミシン目の強い・弱いや大きい・小さいの調節の仕方が分かりましたか」はミシンの操作に関する知識・理解の達成度を測る項目であったが、ここでも男子92.9%、女子94.4%が「はい」と答えており、ほとんどの児童がミシンの操作についてよく理解した上で、取り組んでいたことが分かる。「上手にぬうために工夫ができましたか」では、「はい」と答えた者が、男子71.4%、女子83.3%と比較的高い割合ではあるが、興味関心や知識理解についての質問より、「はい」と答えた者の割合が下がっている。また、技能面の達成度を測るために設定した項目「ミシンぬいを使って自分で満足のいくぞうきんがぬえましたか」では、「はい」と答えた者は、男子57.1%、女子66.7%と、これまでの項目よりも「はい」の割合は下がっている。「ぞうきん以外に、もっといろいろな物をミシンを使ってぬってみたい気持ちになりましたか」の項目では、自らの学習の発展に対する意欲について尋ねたが、ここでは男子85.7%、女子94.4%が「はい」と答えており、かなりの者が次への学習意欲を有していることが分かった。最後に、「ぞうきんぬいの学習を大学生の人にアドバイスしてもらいながら行って、よくわかりましたか」では、男子92.9%、女子100%が「はい」と答えている。

以上の結果から、今回のミシン縫いの授業では、児童が学習全体に意欲をもって、またミシンに対する知識・理解をもって積極的な態度で取り組むことができたといえる。また、ほとん

どの児童が大学生の授業参加に関して肯定的な評価をしていることから、今回の児童の積極的な取り組みに、大学生の指導参加がプラスに作用しているといえることができる。また、一方で少なくない児童が自らの作品に十分な満足をもつことができなかつたが、このことは、技能の充実を図る授業において、大学生などの支援者が重要になってくることを示しているといえよう。ただ、この技能面に関する若干消極的な結果は、児童のなかで授業自体への不満足を示すものではないだろう。次への製作意欲を示した児童が全体で9割を超えていることから、技能面での消極的自己評価は、自己に対する評価基準を児童自身が厳しく設定していることの表れだと解することができる。

（2）自由記述による自己評価

授業②では、第2次（3・4/6）、第3次（5・6/6）の最後にそれぞれ児童が自由記述による自己評価も行った。表Ⅳ-2は、自由記述のなかで、積極的な記述と反省的な記述の取り出し、それを項目ごとに整理したものである。なお、児童は、複数項目を記述している。

表から分かるように、積極的な記述の割合が、第2次終了後では64.1%、第3次終了後では80.3%と高く、評価票での自己評価と併せて、今回児童は授業に積極的に関わったということがいえる。さらに、注目すべきは、第2次終了後と第3次終了後の積極的な記述が16.2%も上昇していること、なかでも「大学生の協力がよかった」の記述の割合が1.2%から11.3%へと、およそ10%と大幅に上昇していることである。これは、児童の授業への積極的な取り組みに、大学生の参加がきわめて大きな影響を有していることを示すものといえよう。

表Ⅳ-2 児童の自由記述項目（授業②）

	第2次終了後（計35名）	人（%）	第3次終了後（計36名）	人（%）
積極的な記述	楽しかった	15(19.2)	楽しかった	16(22.5)
	上手にできた	9(11.5)	上手にできた	10(14.1)
	もっと縫いたい	8(10.2)	大学生の協力がよかった	8(11.3)
	きれいにできた	4(5.1)	家でもつくりたい	6(8.5)
	だいぶできるようになった	4(5.1)	つくれてうれしい	5(7.0)
	上手になりたい	3(3.8)	上手になりたい	3(4.2)
	理解することができた	2(3.8)	理解することができた	2(2.8)
	次も頑張りたい	2(2.5)	友達と協力しあえた	2(2.8)
	他の技術も身につけたい	2(2.5)	達成感があった	1(1.4)
	思ったより簡単だった	1(1.2)	満足したものがつくれた	1(1.4)
	大学生の協力がよかった	1(1.2)	惜しくて使えない	1(1.4)
				チャコペンを使うと良かった
			簡単そうだった	1(1.4)
	小計	50(64.1)	小計	57(80.3)
反省的な記述	難しかった	11(14.1)	難しかった	6(8.5)
	失敗した	5(6.4)	失敗した	4(5.6)
	あんまりできなかった	3(3.8)	上手にできなかった	2(2.8)
	思うようにできなかった	3(3.8)	ミシンより手縫いがよい	1(1.4)
	大変だった	2(2.5)	イライラした	1(1.4)
	つまらなかった	2(2.5)		
	不安だった	1(1.2)		
順番待ちがいやだった	1(1.2)			
	小計	28(35.9)	小計	14(19.7)
	合計	78(100.0)	合計	71(100.0)

2. 大学生

(1) 感想文 - 第2次終了後 -

授業②に参加した学生には、第2次終了後自由記述の感想文を求めた。その感想文からは、今回の指導参加を通して学生が、1) いい経験になった、2) 授業の構成の仕方・教師としての指導の仕方を学ぶことができた、3) 子どもの実態に触れた、4) とまどい・不安等を覚えたということが分かる。以下、これらに関する記述を抜粋する。

経験

- ・自分にとって、とてもよい経験になったと思う。また、実際に、子どもたちとふれあうなかで、自分の教師になりたいという気持ちがさらに強まったと思う。
- ・実際に授業をみることで初めてきづくこともたくさんあったので、この貴重な体験を忘れずに、教師を目指す過程に充分活かしていきたいと思った。
- ・まだまだたくさんの授業を見たり子どもと接したりしていった勉強させていただきたいと思った。
- ・もっといろいろなことを吸収していかなければ、と思った。

授業構成・教師の指導法

- ・授業を見ていて目標がはっきりしているなど、と思った。子どもに伝えたいことが明確であったため子どもも学びやすかっただろう。最初、前回の授業をふり返ることから始まったが、画用紙に書いた感想が色分けしてあったことに工夫しているなどと思った。
- ・ビデオを見ているときも、ただビデオをみせるのではなくて、ビデオの途中の大切なところでは「ここは大切だよ」と声がけをしたり、説明の補足をしたりして、生徒の興味・関心がビデオからそれないように、理解しやすいようにしていた。
- ・ぬい方の説明のときも、まず先生が今日すること一通り言ってから、説明に入っていたのを見て何と何をしたらいいのかということをもっと事前に言うことで、子どもたちの授業への目標を明確にしたり理解しやすくできていいなと思った。

子どもの実態

- ・それまで裁縫道具をかまったり、布をさわったりとおちつかなかった子どもたちが、真剣にビデオを見ていたのが印象的でした。みんな早くミシンが触りたいというやる気にみちているように感じました。
- ・子どもたちは、ちゃんとビデオで見たことも覚えていたし、分からないところがあったら教科書を見たり自分から聞いてきたり、とても自主性があってすごいなと思った。
- ・特に私が教えた2つの班は誰かが作業しているときは、自分関係ない、という感じで困ってしまった。積極的に学ぼうとする子はいいが、自分から聞いたりできない子のことも気にかけてやることも重要である。

とまどい・不安

- ・教育実地研究では授業を見るだけで、実際に教えるということにはなかったので、最初はどうぞすればいいのかとまどってしまった。
- ・自分ではミシンの使い方をきちんと理解しているつもりだったが、実際に生徒に「ここはこれであっているよね?」「ここはどうするん?」などと聞かれると、どんどん自信がなくなってきて、近くの友達に聞いたり、先生に聞いたりして確認しないと不安だった。やはり人に教えるということは、自分がただ知っているだけではなくて、しっかりきちんと理解して自信がもてるくらいじゃないとだめなんだと改めて実感した。
- ・(児童のふざけあいに対して)私はあまり強く言えずに、そのままにさせてしまいました。後で、先生が止めて下さったのですが、今思えば大ケガにつながる危ない行為だし、本人の練習にもなりません。甘かったなと痛感しました。

以上の記述からは、授業構成や進め方、教師の指導方法、子どもの実態などさまざまなことを学ぶことで、また自らの不十分さや至らなさも実感することも含めて、学生が今回の指導参加を積極的・肯定的に受け止めていることが分かる。

(2) 質問紙 - 第3次終了後 -

授業②では、第3次終了後に「附属小学校における指導参加に関して」という質問紙を配布し記入してもらった。

「小学生の指導に関わってどう感じましたか」に対しては、7名全員が「楽しかった」と答えている。「自分自身のミシンの操作や縫い方についてどう感じていましたか」については、これも7名が「あまり自信はないが、一通りはできると思っていた」と回答している。「実際に指導してみてどう感じていますか」には、7名中6名が「なんとか指導できたと思う」と答え、残る1名が「あまり指導できなかった」と答えている。あまり指導できなかった理由としては、「注意しなければいけないことがあったのに、うまく説明できずにそのままにさせてしまった」ことを挙げている。また、「教育実習が始まる前に、附属小学校で直接指導にかかわることについてどう思いますか」に対しては、全員が「いいことだと思う」と答えている。その理由として学生は、教育実習の課題を事前に設定することができる、子どもとのコミュニケーションの方法が分かる、教師になる意志を早期に固めることができる等を挙げている。「実際に指導にかかわったことで、どのように感じましたか」に対しては、「特に感じることを一つ」回答させたが、6名が「教師の指導の仕方をもっと勉強したいと思った」と答え、1名が「教科の内容について、知識を増やしたり、技能を向上させたいと思った」と回答している。

以上の回答からは、全員が教育実習前の附属小学校での授業参加を非常に意義深いものと捉えていることが分かる。とくに、教科に関する現在の自分の知識を確認できること、教師として求められる様々なことを自ら発見できることに意義を見いだしているように思われる。

今回参加した7名のうち、現在のところ明確に教員を志望しているのは3名であり、残りの4名が未定としている。教員志望の3名は、自由記述の感想から、とくに熱心に取り組んだことが分かった。たとえば、そのうちの1名は、「今日はこの前にひきつづきミシンだったので、朝からミシンを出して少しぬってみました」と記しているように、本次の授業参加にあたって事前に準備をしている。ほかの2名の自由記述からも、今回の経験を今後の実習や教職についての学習につなげていこうという意欲が読み取れた。残りの4名も、現在のところ明確には教員を志望していないが、上に示したように総じて今回の経験を肯定的・積極的に捉えており、そこから今後の課題を見いだしている。こうしたことから言えることは、教育実習前に実際の授業支援にかかわることは、教員を志望している学生においては、よりいっそうその意志を強くするものとなり、一方教職につくかどうか迷っている学生においては、教員という仕事の魅力を印象づけるものとなるということである。

V. おわりに

教育実習後の学生は、実習体験を踏まえて、余裕をもちながら自己の指導力を高め、新たな課題を発見することができた。とくに大学院生は今回、児童の製作したぞうきんについての達

成度や、児童の自己評価票の分析に携わったが、そこから指導と評価の一体性に関して、独自の見解を発展させることができた。また、これらの学生に支援を受けた児童においては、製作物に関する目標達成度や学習意欲は総じて高く、かつ学生のアドバイスをほとんどの児童が肯定的に捉えていた。こうしたことから、教育実習を経験した学生にとって、子どもとの触れ合いを継続することは、教職への資質をいっそう高めていくことに効果的であり、またそうしたある程度の経験を積んだ学生の支援は、児童の実技学習にも大きな効果をもたらすということができる。

一方、教育実習前の学生には、今回の授業参加はとくに有意義なものとなった。学生全員が、教育実習前に実際の学校で子どもの指導に携わる経験を積極的に捉えている。とくに、教育実習での課題を事前に確認できることが、今回の積極的評価につながっているといえる。教育実習前の参加学生は7名であったが、そのなかで教員志望の学生は、今回の経験を通していっそう教職への意欲を強くし、他方まだ教員になることを決めかねている学生は、子どもと接することの楽しさ、教えるということの興味深さに触れることとなった。また、これらの学生の支援を受けた児童については、授業後の自己評価をみると、多くの児童が教材に対する意欲・関心をもって熱心に取り組んでおり、ミシン縫いに関する知識理解も深めていることが分かった。また、一回目（第2次）に比べ、二回目（第3次）の支援終了時には、「大学生に教えてもらってよかった」と考えている児童が大幅に増えている。こうしたことから、教育実習前の学生が実際の学校で支援に携わることは、児童にとっても効果的であると言える。

以上のように、今回の連携活動は、教育実習前後のどちらの学生にとっても、きわめて効果的であった。今後、こうした連携を全体的に推進していくことが重要となろう。最後に、これを進める上でクリアすべき課題を、われわれの連携活動の反省を踏まえ、2つほど指摘しておきたい。第一の課題は、大学と附属学校との時間割の調整である。これはただちに解決できる問題ではないが、学生が余裕をもって附属学校に出かけるためには必要なことといえる。第二の課題は、大学と附属学校の教員同士の密接な話し合いである。この点に関して、今回われわれは総じてうまくいったと考えてはいるが、大学と附属学校の年間指導計画を相互に調整しておけば、双方にとってプラスの交流が可能となる。今回のようなとくに実技習得の授業では、児童の学習に学生サポートがつくことはきわめて有効であるし、学生においてもこうした支援に関わることは有意義である。ここに挙げた課題は学部・附属学校の運営全体に関わるもので、ただちに解決できるものではないが、教育学部における教師教育の充実および附属学校の授業の充実を目指し、われわれは家庭科教育の立場から徐々にではあるが、今後も連携を強化していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 軸丸勇士・渡辺恭英・野崎純一・伊藤安浩(1999):「体験的学習を活用した教員養成の試み」『教科教育学研究』(日本教育大学協会第二常置委員会編)第17集,117-134頁.
- 2) 島根大学教育学部附属教育実践指導センター編(1993):『教育実地研究』島根大学教育学部附属教育実践指導センター.
- 3) 中間美砂子編(2001):『小学校家庭科指導の研究』建帛社.

-
- 4) 山田潤次(2000):「大学と付属学校園における共同研究体制の構築 - 音楽科における教員研究・教員養成・教育実践の場としての機能充実を目的として - 』『教科教育学研究』(日本教育大学協会第二常置委員会編)第18集,123 - 141頁.